

『諸病源候論』における歯病の

医説に関する考察

戸 出 一 郎

『諸病源候論』卷二十九、牙齒諸病には、齒牙の症候が二十一項に分けて記載されているが、そのうち大多数の項では経脈の走行を用いて病態の説明をしている。即ち、手足の陽明脈と足の太陽脈が齒に入る。齒は骨の終る所、髓の養う所で、もし経脈が虚の状態になったり、髓氣が不足した場合には、風または風冷の邪氣が経脈に入り、齒牙並びに齒周組織に疼痛・腫脹・化膿・出血等の症状をひき起すというのである。これは内経の医説に基く病理論であることとは言うまでもない。

しかし同一症候内で内経にない理論も述べられている。例えば牙齒痛候・牙痛候・齒痛候では、はじめに内経的病理論を述べ、その後には蟲による齒牙の蠹蝕が齒痛の病因と

して並記されている。これは内経の医説に関係はないが、齒痛の病因として大切な要素と考えられていたのである。

蟲による齒痛については別に項目を設け、牙齒蟲候・牙蟲候・齒蟲候として挙げられている。この三項では、蟲が齒牙を食して孔をあけ、齒牙の疼痛をひき起すと記述している。この三項の立て方は前の牙齒痛候・牙痛候・齒痛候とよく似ており、終りの一項に養生方を引用しているところも同じである。しかし前者と決定的に違うところは経脈について全く触れていない点である。牙齒諸病の中で経脈にふれていないのはこの三項と齒齲候のみである。齒齲候は蟲が齒を食して齒斷に達し、化膿するに至ったものを言う。その他の症候では、拔齒損候の外傷を除いてはすべて風・冷を病因とする経脈説によって説明されている。

右のように『諸病源候論』における牙齒諸病の病因は風冷並びに蟲であるが、これらの病因論の由来について考察を加えてみたい。

風・冷を病因とし、経脈の変動によって起る症候の解説は内経の医説に基いてなされているが、蟲については立場

ものであると考える。

(北里研究所附属東洋医学総合研究所・医史文献研究室)

倉公淳于意 その一

家本誠一

はしがき

倉公、淳于意は、紀元前二世紀頃に活躍した前漢の医師である。その経歴は『史記』の『扁鵲倉公列伝』に詳しい。これについては後段で考察する。

『史記』・『倉公伝』には、倉公が経験した二十五件の症例が報告されている。その各々の症例報告は、次のような項目にわたって詳細に記されている。

病名 症状 治療 転帰
病因 診断 病理 病位

私はこれらの項目について、倉公の記載する所と『素問』『靈樞』の記述とを比較対照すると共に、現代医学的にどのように理解したらよいかをも検討して、その医学の内容を明らかにしたいと考える。

先ず病名(含症状)の検討から始める。